

## 記事

1. 想像力のすすめ
2. 読書感想文コンクール  
総評と作品
3. 校内俳句コンクール  
総評と作品

# 奈良高専 図書館だより

1990年3月 奈良工業高等専門学校図書室 発行

## 想像力のすすめ

図書館委員 土井 滋 貴

松任谷由美という歌手がいます。以前は荒井由美とっていました。もう10年になるはずですが。最近CDの売上等で話題になっていますが、相変わらずポップで程よくおしゃれな曲づくりは変わりません。たかがユーミンなんかというかもしれませんが、こういった質の高さを保ちながら創作を続けていくことは並の感性や想像力の持ち主ではできません。

以前まではそういった感性とか想像力は持って生まれたもので後からトレーニングするようなものではないと思っていました。しかし最近、確かにそういった先天的な要素は強いにしろ、ある程度、いやほんの少しはなんとかあると思うようにしています。曇らせたり眠らせないようにするといってもいいかもしれません。

いわゆるサラリーマンとしての技術者をめざすのでしたら気にしなくてもいいかもしれませんが、工学の世界でもそういった想像力がつくりだすテクノロジーやサイエンスへのセンスやテイストといったものがかならず問われるようになるはずですが。例えば今の日本とアメリカの工業技術に関する状況を少しまじめに眺めてみればそれが判るはずですが。またそういうセンスやテイストは昔からいわれている技(わざ)や匠(たくみ)に相通じるものなのかもしれません。

個人レベルでは更に想像力は大切です。ちょうどこれが読まれている頃は花の季節の始まりだと思えます。この季節が何かうきうきするものを感じさせるのはなにも花が咲くからとか暖かくなったからではありません。毎年経験してきているこの季節の頃の思い出や新しい年への期待といったものが無意識に気持ちをふくらませているのだと思えます。

最後に図書館のよいしょをしましょう。こういった想像力を豊にするこれといった場所や方法はないと思えます。けれども専門とも今興味のあることも直接関係のない本や絵や写真集を今すぐしている時間を開放して、そして“図書館で”眺めるのもよいかもしれません。

平成元年度 読書感想文コンクールを終えて

図書館委員会

毎年行われている夏休み課題図書(4・5年生は自由選択)の読書感想文コンクールは、今回で14回

めになります。応募作品465編の中から、図書館委員会と国語科の先生方が慎重に選考した結果、次のように、11名の諸君の入選作を決定しました。氏名をここに紹介して、その栄誉をたたえたいと思います。

〔第一部：文学の部〕

最優秀	1	C	伊藤奈穂子
優 秀	2	C	今中見名子
優 秀	3	I	太田 陽子
佳 作	3	C	斎木 将人
佳 作	2	I	須野原啓子
佳 作	3	MA	清水 裕士
佳 作	2	MB	藤岡 恵
佳 作	1	C	平井 孝子

〔第二部：文学以外の部〕

最優秀	2	C	川西 雅子
優 秀	4	E	小西 健一
佳 作	3	C	羽原 登世

この他に、選考の過程で優れた評価を得た諸君は、次のとおりです。氏名を記してその努力をたたえたいと思います。

1 MA	石丸 博	1 MA	小林 智生	1 MB	大北 壮浩	1 MB	山内 知子
1 E	大塚 智仁	1 E	斎藤 広政	1 I	真野 陽子	1 I	中井 智也
2 MA	岩井 聚	2 MA	松谷 仁臣	2 MB	楠 欣宏	2 MB	福田 敏孝
2 E	桐島 俊之	2 E	前田 祥光	2 I	八尾 佳則	3 MA	細井 紀夫
3 MB	豊田 哲郎	3 MB	福田 大樹	3 E	大門 健三	3 E	多田 和也
3 I	柴田 修	4 MA	田野 博	4 MA	新村 貴志	4 MB	大東 博之
4 E	東郡 徹爾	4 I	武藤 武士	4 I	吉川 拓也	4 C	羽田 知由

選考の仕方は、昨年と同様に、〔文学の部〕と〔文学以外の部〕の2部立てとし、それぞれの部門から最優秀、優秀、佳作を選ぶことにしました。

応募提出の状況は、4・5学年の自由選択で59編、1～3年の課題図書では406編でした。その内訳を数の多い順に並べると、次のとおりです。

〔文学の部〕

老人と海	(E・ヘミングウェイ)	118
子熊物語	(J・カーウッド)	49
それから	(夏目 漱石)	42
どくとるマンボウ青春記	(北 杜夫)	29
渚にて	(N・シュート)	25
李陵	(中島 敦)	21
新選組血風録	(司馬遼太郎)	20
おくの細道	(松尾 芭蕉)	0
その他		

〔文学以外の部〕

白球礼讃	(平出 隆)	23
零の発見	(吉田 洋一)	18
ぼく、もう我慢できないよ	(C・キム)	15
ことばと文化	(鈴木 孝夫)	6
独創は闘いにあり	(西澤 潤一)	5
雪	(中谷宇吉郎)	2
ブッダのことば	(中村 元) 訳	1
又五郎の春秋	(池波正太郎)	0
		21

この中から、第一次選考をパスした作品について更に選考を重ね、上記の諸君の作品を入選作に決定しました。選考の最終段階では、13人の先生方が、書き手の氏名を伏せて読み合わせ、投票によって決めました。その際、何年生の作品か、学年も考慮の対象にしています。

総じて、今回の応募作品は充実したものが多く、諸君の経験した読書における感動と作文することの楽しさが、その文面からひしひしと伝わってきました。特に入選作は、いずれも自分自身の視点からしっかりと問題を捉え、深く追究し、さらにそれを的確な表現で問いかけようとする態度が貫かれており、高く評価できるものです。次に、その入選作を紹介しますので、読み比べて参考にして下さい。

## 〔第1部 文学の部〕

### 「渚にて」を読んで

——人類最後の日——

1 C 伊藤 奈穂子

「SF小説」という分野には多くの拒否感があった。しかし——人類最後の日——このタイトルに添えてあった六字を目にした時、これは読まなければという直感的なものがあつた。私は戦争というものを経験していないし、私の両親にも記憶の無い年頃の経験である。それに大きな事故だつてしていないから、自分の人生が終わるなどと考えたことがない。だからまして「人類最後の日」なんてことは考えたことがなかつた。今を生きていけばいいと思う、自分さえ良ければいいと思う私としては。

「少佐は幸福感にひたって目を覚ました。」彼には愛する妻がいる。愛する娘がいる。だから何でもないあたりまえの事なのだろうが、この何気ない文章が私をどぎまぎさせた。というのはいよいよ最後が迫っているんだと思わせられた。朝起きる時、「幸福感」てものを私は感じたことがないように思う。というより何にも感じず、ただあたりまえのように習慣として起きている。そもそも私にとって「幸福」というものは欲しかった物が得られた時、試験でいい点が取れた時、そんな時に感じるだけである。命があることに、生きている事に「幸福」というものを感じたことがなかつたと思う。むしろそれらに「不幸」を感じたぐらいである。だからいっそうそのような気分がしたのであろう。ふとそんな風に考えた。「きょうもいいお天気だよ。」このピーターの一言がとても新鮮である。やさしい夫。現代風で何だかほほえましい。そんな感じで時には軽く笑ったり、時には少し悲しくなったりしながらページを進めていったのだが、ふと我に返つた時、無気味な感じがした。北半球の諸国は放射能汚染で死滅し、さらにそれが南下し、彼らを襲おうとしているのに、あまりにも普通の生活すぎるのである。それが筆者の想像する人類の最後であり、希望する最後であるのだろうか。戦前と変わったことと言えば、トラウトの解禁日が早くなつたこと、オスボーンのフェラリがグランプリレースで優勝したこと、最後に人類が滅亡。あまりにも何気なさすぎる。

「そして、大きなハンドルを前にして、すわつたまま、錠剤を口に入れ、ひと口のブランデーといっしょに飲みおろした。」この文で終わった。死というものはこんなに簡単なものなのか。これがたつた一言でいう私の感想である。あまりにもあつけないものである。人類の滅亡というものは。では人類がずっと存続するということが難しいものであるのか。そうではないと思う。今生きる人間がそれぞれの未来を目指し、いつまでも人類の歴史を築きあげようとするれば、人類最後の日はやってくる来ないと思う。だから今、歴史の一部である今を大切に走り、次のランナー、その次のランナーへとバトンを渡し、リレーをしつづけなければいい。

あとがきにトマス・K・フィレンターは、「これが小説であることを望む、しかし小説だといひ切れるだろうか。」と恐怖の叫びをあげた。と書かれてあつた。現在は大概の国で、核兵器などを持つようになった。第二次世界大戦に比べて一段とレベルアップし、スイッチ一つで操作が出来るしまうという。段々とこの本の内容に近づきつつあるような感じがする。だからこの最後になる前に言いたい。我々の世界だけでなく未来に続く人々の世界、今まで築きあげてきた人々の世界だということ。

### 「子熊物語」を読んで

——自然との共存——

2 C 今中 見名子

私が、課題図書「子熊物語」を読むようになった切っ掛けは、「殺したいという衝動よりも強い感情がある。生かしたいという感情だ。」という一文に魅かれたためである。確かにカッコイイ文ではあるが、その真の意味はこの本を読まずしては理解し得ないだろう。

この物語は、カナダのロッキー山中を舞台として展開する。主人公はティールとムスクウァである。ティールは、ロッキー山中に君臨する巨大なグリズリーキングだ。ムスクウァは、エサを獲ることも他の動物たちから身を守る術も知らないままに母を亡くして自然の中に放り出された子熊である。そして、二頭を追いまわす狩人たちとの関わり合いや、ムスクウァがティールにならって野生動物として次第に成長してゆく姿が描かれている。



夏の初めから冬の到来に至るまでのロッキー山中の、時に厳しく、そして優しく、そこに生きるすべての動物たちを包みこむ大自然の雄大な営みが、至る所に散らされた自然の描写により、手にとるように伝わってくる。写実的な野生動物らしい描写の中に、ロッキーに生きるさまざまな動物の生態をみることができた。野生のヤギやカリブーの群れ、ティールが橋に使えるほどのダムを作るビーバー、独り言をつぶやくリネズミ、ティールやムスクウァはもちろんのこと、ロッキーに住む動物たちは、物語の中で、生き生きと真剣に生きていたと思う。

神の手で王位を授けられたかのようなティールは、平和的な王で、強く、寛大で、老いには敬意を払い、小さい者や弱い者には優しく、命をかけて守ろうとする。いわゆる男性らしさの理想像といえよう。大自然のキングが理想に近いのではなく、理想が自然にならうのかも知れない。ムスクウァの成長もまた理想的であろう。生まれたばかりでまだ何も知らない状態から、自ら体験し学ぶ。親代わりのティールは、始めは当惑したが、決して過保護でなく静かに見守っている。純粹で愛らしく、知りたがりやのムスクウァの行動や仕草に私は思わず微笑んでしまう。読むにつれ、熊の視点でものを見ている自分に気付く。それは「人間も自然界の仲間である」ということを思い出させてくれた。

しかし今や人間は、地球的規模で自然を破壊し、人間をも含む動物すべての生存をおびやかす存在と化している。いうならば殺戮者にほかならない。我々を代表するかのよう知的な文明人として描かれている探険家ジムは、自然の魅力を深く感じとれる人物であったが殺戮者でもあった。彼は、ティールを追い続けるうちに、人間が自然界の一員であるのに殺戮者でもあることに気づく。そして、殺戮とは何か、殺戮により得たものは何かについて考えさせられ、その矛盾の壁にぶつかった。

そんな時、銃を失って無防備のジムとティールが岩壁で鉢合せをし、ジムは死を覚悟する。ティールは一撃で倒せるにもかかわらず、強者の憐れみによって静かに立ち去った。自然の中では無意味な殺戮はほとんどなく、狩りには生活上の必要性だけが伴う。ジムが命びろいした直後、猟犬がティールを追いつめた。ティールを執拗につけ狙ってきたジムだが、構えた銃は猟犬をうった。ジムは犬を犠牲にしてティールの命を救った。私は、

ジムは「自然」に従った行動をしたのだと思う。「自然」は寛大なものかも知れない。

いつの頃からか人間は自然から遠ざかり、自然に背を向け、自然を敵にまわしてしまったのだと私は思う。しかし、自然の破壊者であることの自覚と反省を近頃よく見聞きする。エルニーニョ現象などの世界的異常気象や、オゾン層の破壊による未来への影響などについて真剣に考え、その対策に取り組むなど、自然保護の運動は急速に高まってきた。人間は、将来自然たちと共存できるようにならなければいけないと思った。

## 「老人と海」を読んで

3 I 太田 陽子

最初、老人は単に風変わりで自信過剰なだけの人かと思った。少年が何か老人のためにしたいと言っても老人は断る。そして、投網や魚のまぜご飯など、ありもしないのにあるように少年と話す。また、海へ1人で出ると、大声でひとりごとを言ったり、鳥に話しかけたりするので、おかしい人かと思った。

しかし、優しさも、淋しさも持っている老人だった。小鳥には海は厳しすぎると言ったり、話しかけていた鳥がいなくなれば、がっかりしたり、少年と漁に出ていた頃を思い出して「あの子がいたらなあ」と口に出したりもした。老人の意外な一面かと思えば、そうではなかった。作品のあちらこちらに老人の優しさがみられ、暖かいものを感じた。

不漁から85日目にかかった大物に対して、すばらしい、強いと賞賛する。その上、「お前が大好きだ」とまで言う。これ以上の魚には、もうお目にかかれなと老人は思ったに違いない。いろいろな手段を知っていて、経験も十分にある自分と対等に戦える魚には、もう出会えないと思ったのだろう。だからこそ老人は命を賭けて戦ったのだと思う。大物がかかってから4日目、とうとう老人と大魚との戦いが始まるが、この戦いはすごい。恋愛小説の主人公に自分になりきってしまうことは多々あるが、この作品は、どの場面にも目の離せない迫力があって、この場面は特にそれが強く、どんどん引き込まれていった。

戦いは続き、老人も疲れからの目まいなどで負けそうになるが、結局、老人が勝つ。私は何故か、



ホッと安心した。

だが、安心する間もなく再び戦いが始まる。捕えた大魚を狙ってやって来る鮫との戦いである。老人の大魚に対する思いが表面に出てくる。その思いは、自分の獲物が失くなるというものではなく、自分の兄弟分の大魚に対する愛情の様なものだと思う。「夢だったらよかった。魚なんか釣れないほうがよかった」と言う老人は、大魚が鮫に食べられた姿を見ようとはしない。鮫と戦う老人の姿を勇敢だと言うべきかもしれないが、悲しみからの怒りが老人をそうさせたのだと思う。老人は、大魚がすべて鮫にやられてしまうまで、必死に戦っていた。私は、何かやりきれないような思いにかられた。

老人は海の上では、あくまでも強気であった。自信を失いかけても、すぐにそれを自分で否定していた。しかし大魚が頭と背骨と尾だけになってしまった後は、全く逆である。舵をとる以外何もせず、ベッドが恋しくなったり、打ちのめされるのも気楽だなどと考えている。老人らしくない一面を見てしまった私は、情けなく感じた。あれだけ勇気と希望とを持っていた老人はどこへ行ってしまったのだろうか。だが、多分、少年によって老人は再び元のように海へ出かけるのだろう。老人は、少年の前でも弱気な所を見せる時があるが、少年はそれを否定して元気づけようとする。健気な少年である。少年はいつまでも老人を慕うだろうし、そうしている間はどんなに大きな打撃を受けても再び老人は漁に出るだろう。年齢は離れていても2人の友情は強いものだと思う。私は、また暖かいものを感じた。

## 『李陵』を読んで

3 C 齊木将人

『李陵』を読もうと思った動機は二つある。一つ目は、この『李陵』の作者である中島敦の代表作の一つである『山月記』を昨年の国語の授業で習ったことである。この『山月記』は、「産を破り心を狂わせて」まで詩業に熱中した不幸な詩人の李徴が、虎と化しても、なお自分の詩業の一部を後代に伝えないで「死んでも死に切れない」という物語だった。そしてその物語には季徴が虎になっていく過程や虎になった後、また友・遠彦と出会う場面などさまざまな場面があった。そし

てその場その場において李徴の気持ちや考えに同情したり反論したりと、また自分が李徴だったら…など物語の中へ引っ張り込まれるような感覚だった。再度、物語の中へ招待してくれるのを期待して『李陵』を選んだ。

『李陵』を選んだ二つ目の理由は、司馬遷作の『史記』に関連があるからだ。司馬遷の『史記』といえば内容は知らずとも名前ぐらいは誰でも知っているほど有名なものだろう。また、『史記』は前漢初期の歴史書であり中国の正史のはじめとされるほど偉大な書物である。これほどの書物にただ一武将の李陵がどうつながるのか、また大げさにいえば『史記』を作成した舞台裏には何かかくされた真実があるのかなど、興味がつきなかつたからである。

まず初めに『李陵』を読みながら「おや、おや」と思ったのは「司馬遷」である。僕が頭に描いていた司馬遷像は偉い学者で人格もすぐれた人だった。確かにはじめは偉い学者ではなかったもののそれなりの人物であった。しかし、宮刑ののちは人間でなくなってしまったと思う。なぜなら以前、論客といわれた司馬遷が一切口を開かなくなり、笑うことも怒ることさえも無くなったからである。そして何よりも悪霊にでも取りつかれたようなすさまじい風貌で史を書き続ける姿は人ではないように思える。そしてこの姿を中島敦は「知覚も意識もない一つの書写機械に過ぎぬ」と表現した。しかし、この機械が後世に残るすばらしい作品をつくったのは事実だ。そして僕はここでこんなになりながらも『史記』を完成させた原動力がどこにあるのかをえらく考えさせられた。その結果、『史記』を完成させたいという熱い思い、情熱ではないかと考えた。しかもこの情熱は司馬遷本人は気付かない思いではないかと。なぜなら彼が宮刑ののち、死にたくて、しかも死を恐れる気持ちなど皆無なのに死ねず、なぜ死ねないのか彼自身わからなかったからである。そして経験から情熱という感情は後からでてくるものだと思うからで、その経験とは先ほど引退した野球であり、終わって見た今、しみじみとついこの間まで白いボールに情熱をかけていたんだなと思うことである。実際プレーをしていた間はそんなことは思わなかったから司馬遷も『史記』を仕上げたのち、あとき俺を死なせなかったのは「情熱」だったんだなと一瞬ぐらい思ったかも知れない。

期待した李陵と司馬遷・『史記』との関連は司

馬遷が李陵をかばったために宮刑になったことし  
かない。憶測だが彼は宮刑にあってからバリバリ  
書くことになる。つまり刑にあっていなければの  
らりくらりと『史記』を書き続け、やがては寿命  
か何かで完成をせずに亡くなっていたかもしれ  
ない。そう考えると宮刑の原因をつくった李陵は  
『史記』完成に大きな影響を与えているのかも  
知れない。

物語への招待という点については司馬遷が宮刑  
を言い渡されて自分のどこが悪いのかと悩む場面、  
李陵が敵に完全に寝返ってしまう場面などいろ  
ろあったが『山月記』よりも話しの中へ入れな  
かったのは確かだ。それは司馬遷に強くひかれ  
たのが原因だが、いいかえると司馬遷の登場  
する場面では完全に物語の中に入ることができ  
たということで『李陵』は読書前の期待を裏切  
りなかつた1冊といえると思う。

## 「どくとるマンボウ青春記」 を読んで

2 I 須野原 啓子

青春——自らマンボウと名乗り、斎藤茂吉とい  
う有名歌人を父にもつ、彼の青春とはどんなもの  
だったのだろうか。また、これからまだまだ続く  
であろう私自身の青春を謳歌していくうえで、彼  
の青春記は参考になるに違いない。そんな思いか  
らこの本を選んだ。

戦中・終戦・戦後という時代の激動の中で、彼  
は青春を送った。このような時代だったので、空  
腹がつきまとう。居候の身なので遠慮して「飯を  
三杯しか食べなかつた」という、育ち盛りの彼に  
は人一倍つらい時代だったようだ。空腹がつきま  
とう青春は、送りたいものではない。かといっ  
て、彼の青春は暗い部分ばかりでなく、楽しく、  
おかしいことの方が印象深い。なんといっても、  
旧制高校時代の彼は面白かつた。

旧制高校時代、彼も変だったが、教師も変わ  
っていた。遅刻の理由を克明に弁解しはじめる先生。  
生物の試験で「鬼」について書かせる先生。乞食  
によく間違われ、「やりまっしょ！」といわれる  
と、授業中になんとか節を歌いだす野武士のよ  
うな風貌の先生など。こんな変な先生達がいたか  
らこそ、学生達も変わっていたんだと思った。そ  
の途中で私が一番大それたことをするなと思つたのが、

彼を含む寮の委員全員で試験をサボルというこ  
とだった。自らが寮を背おっているのだという使  
命感から、カボチャの買い出しに行くのを日課と  
し、ほとんど学校へは出なかつたため、合格点  
は取れないと思つたからだった。しかしこの背  
景には、全員が受けなければ、学校側も事情を  
考え善処してくれるにちがいないという考えが  
あつたからだったし、助けてくれる先生もいた  
からだった。私はなぜかこの事に「青春だなあ。」  
という感想を持つた。

こういう派手なことをやる一群の中において、  
一人になつた時には文学の世界にひかれてゆく、  
ある意味では孤獨な青年の部分が彼にはあつた。  
その陰には父であり歌人である斎藤茂吉があ  
つた。彼もまた短歌や詩を書いた。感傷的なもの  
を好んだという所が、なんとなく青春を思  
わせた。大学受験、大学生活と進むにつれて  
彼はこの部分を抜けていった。また私には信  
じられないほどの数多くの本を読んだ。そし  
て次第に高校時代から思つていた作家への道  
を夢見た。父茂吉の反対にあい、精神科医に  
なつたが、最終的には作家となり自分の夢を  
かなえた彼はすごいと思つた。なぜなら同じ  
夢をずっと持っていることが出来たからだ。私  
はどうだろうか。まだ自分の夢というものも  
持っていないような気がする。少しさみしい  
なと思つた。

大学時代になると彼は日記を書いた。日記とい  
つてもその日、起こつたことを書くのではなく、  
心境を書いたものばかりだつた。これがとても  
感傷的なもので、また支離滅裂、そして私  
たち少女に「青春とはこんなに恥づかしいん  
だぞ。」と訴えた。確かに書いた本人にしてみ  
れば恥づかしい文がずらーと並んでい  
た。読む側にしてみれば面白かつた。けれど  
彼はそんな日記をいとおしく思つているよ  
うな気がした。

彼が私に教えてくれたのは、青春というものは、  
楽しく、それでいて寂しく、恥づかしく、そ  
れでいておいしい。また楽しいことをする時  
には、皆でやれば恐くないという考えがつき  
まとうということ。これらは、私にも分か  
つていたように思う。そして、夢を持ってい  
れば、それだけすてきな思い出が増えるとい  
うこと、空腹がどんなに辛いかということ  
なども教えてくれた。あと数年して、もう一  
度この本を読み返すと、また違つた感想を  
抱くことだろうと思う。自分の青春も自慢  
できるように育てていきたい。



## 「どくとるマンボウ青春記」 を読んで

3 MA 清水 裕 士

青春とはいったい何であろうか。本を読み終えた僕の思いである。甲子園での選手や観客達の熱い汗臭い青春。学業に入試に机と問題集に向う青春。金のためせっせと安い時給に動かされるアルバイトの青春。また笑いと快楽に浸りきった青春。何にしる青春とは何かを求め、行動と苦悩の塊が若さのエネルギーにより凄まじい回転をしながら生きる一時の期間、或いはその魂のように思える。大人目から見れば僕はその期間の中につっ立っているらしいのだが本人は何も感じず、ポーとしてピンとこない。大人達にしてみればそれが気に入らぬらしい。僕は少し当惑して青春なんて言葉はこの世から消えてしまった方がいいと思っている。大人、特に中年と呼ばれる人たちは自分がその時期にいたことを懐しみ、思いにふけり、自分の理想どおりいかなかったその時期を後世の人々に八つ当たりをして、またはただの若さへの羨みからかもしれないが、やたら「一度きりの青春を……」とか「青春真っただ中において……」などと口走る。僕は今、その言葉に直撃されている立場なのだが、中年になればやはり「青春というものは……」とほざいてしまうのだろうか？

今、自分はその青春を歩んでいる(らしい)のだが、決してそれは清らかな春の川のごとく……とはいかないようである。北杜夫氏の青春記を読んで少し安心した。青春とはマジメで明るく、仏様の慈悲深い光でも浴びているような感じがしたからだ。テレビのドラマ一つにしてもさわやかで例えその中に不孝者と呼ばれる不良が登場してきても結局は更生して、エコーがききすぎた音楽と光に幕を閉じて、僕の感想としても、口ではこんな事あるわけねえとほざいていても心では「ああやっぱりこんなもんかな」と思っていたからだ。彼の青春はそうではなく、戦争という苦労があったが、法に触れることもし、酒を飲み、バカ騒ぎもし、で清らかな川の流れどころか、道端に放出した小便の流れのようである。これこそ青春であり、ありのままの姿、情熱のぶつかり合いと僕は考えているのだが、彼の青春と全く異なっていることは、生きた境遇もそうであるが、北氏をはじめ、その時代に青春期であった人々は僕達、現代

の青春期にある僕達がほとんどもっていない各自独特の思想めいたもの、哲学を持っているということだ。これは管理社会における日本の青年達がほとんど持っていない。これは流されて生きていくことが原因であると僕は思う。人間生まれて十七八の青春期において独自の哲学を持つことは少しはやすぎると思っていた僕はおおいに衝撃を受けると同時に感動に近いものがあった。僕だけがそう思っているのかもしれないがやはり青春期と哲学感いは思想はたいへん大切ではないだろうか。「夢」というものがある。もちろん将来の、我武者羅にあれに成りたい、漠然とこれに成りたい、と考えるよりは悩み、独自の哲学を生みだすことによってその「夢」に近づくことになるのではないだろうか。大人になる前の二三歩手前、青春と名のつく時期に自分の哲学を生み、歩むことにより、理想の自分に近い自分が生まれてくるように僕は考える。

大人の青春を思う心は昔の自分への美しさと懐かしさであるが、青春期を歩んでいる僕の青春を思う心は、ただ悩み、自らの手で思想を造り、自分という人間を形成していくことであってそれは本人の自由であり、他人の青春論などは海に捨ててしまって気にしないということだ。こう考えると北氏の手記は僕の青春に対する喜ばしい最後のお節介ということになる。

## 「こころ」を読んで

——三千代の弱さに思うこと——

2 B 藤 岡 恵

一番の被害者は三千代である。しかし、代助と平岡に、翻弄され、押し流されている彼女の弱さを、少し憎く思ったのも確かである。梅子は三千代のことを馬鹿らしいという。実際、そのとおりである。一体彼女には、流れに逆らう力がなかったのだろうか。それともわざと沈黙を守っていたのだろうか。

漱石は、三千代の心理を描くことから逃げている。したがって、小説の中では、三千代の熱い鼓動は、全然伝わってこない。彼女は翳りのある憂い顔で、ひたすら薄倅な女を演じるだけだ。私は齒痒くてならない。代助の心の動きはこれほど執拗に追っているというのに。また、三千代が可哀相でいたたまれない。彼女は代助の思いのままに



人生を歩かされたのだから。

代助が、三千代を平岡に周旋したのは、唯、自分の名誉のためのみであった。三千代はそのときから、代助のつくった檻の中の住人だった。このようなつまらない、一人の人間の一生を台無しにするような名誉が何になろう。平岡だって同類だ。男子の面目とか、世間的夫の立場とか、しきりにそっちの方を気にかけている。肝心の、本当に大切なことを忘れてしまっている。

——もし馬鈴薯が、金剛石より大切になったら、人間はもう駄目であると、代助は平生から考えていた——代助は、私には理解し難い、多分尊敬すべき理論をうちたててはいるが、結局はきれいごとを並べておいて、金に縛られているだけだ。金剛石を放り出して、馬鈴薯にかじりつくのは、そんなにも躊躇しなければならぬことだろうか。その償いに、他人の細君を愛するのは、彼の身にふりかかるおそろしい災難なのだろうか？

全くこの二人は勝手である。代助には、三千代を愛していない平岡を、責める権利はないし、平岡にも、代助を責める権利は勿論ない。又、代助はおそろしく残酷である。まだ独身でいるというのを盾にとって、自分を正当化しておいて、無意識のうちに、三千代に復讐させている。罰を受けて、当然だといっておきながら、何故、こんなに三千代を苦しめるのか。

小説も後半にさしかかったところで、代助は自然に帰ることを決意する。が、そのときの三千代は、まるで人形のように扱われる。代助は、三千代が平岡の所有だという。「くれないか」「うん遣ろう」現に今生きている一個人の人生を、こんな無責任な、こんなあっけない言葉で、物を買ってのように決めてしまってよいものだろうか。ここでノラなら自分をしっかり主張し、自立していくが、三千代の口は、最後までかたく閉ざされたままである。

この物語を読んで、いかに明治女性が弱い存在だったかを思い知らされるが、しかし三千代の、「何でも貴方の云う通りになるわ」「死ぬと仰しゃれば死ぬわ」という言葉は、単に彼女の弱さというよりも、弱い故に強く生きたいという彼女の真の力を秘めているようではない。

## 「子熊物語」を読んで

1 C 平井孝子

初めて自然の美しさ、すばらしさを見たのは、幼稚園の時に蛍をとりに行った時だった。川のほとりで、ピカッ、ピカッ、と光った蛍を見つけて追いかけてまわした。その時私は、自分の欲望だけで蛍たちをつかまえて家に持って帰ってしまった。かごに入れておいた蛍たちは、やはり次の朝には、動かないし光らなかった。私は、とても悲しく、また、自分がかまえたせいで死なせてしまったと、とてもくやみ、後悔した。その日からもう蛍は、つかまえないでいようと思った。そして、大きくなるにつれて、生き物全ては、自然のまま、自然の法則に従って生きていくのが一番いいと思い始めた。だから大自然の広大さ、厳しさ、そして何といっても私の大好きな動物の事が描かれているこの本が読みたくなった。

「動物の中で一番すぐれているのは。」と聞いたら、たぶん誰もが『人間』と答えるだろう。私は、それは少し違う様な気がする。『人間』は、すぐれているのではなく全てが、まんべんなくあるのだと思う。鼻や目や耳は適当に、力も、そして心も。でも熊のティールは、違った。彼は、目は、野生の動物にすれば見えないほうだ。しかし耳、特に鼻は、すごく利く。それよりも、もっと人間とは、比べ物にならないほど心が大きい。何といっても『人間』というのは、やはり口では言っても自分の事を一番に考えるだろう。しかし、ティールは、子熊のマスクワ、恋人のイスクワオを真っ先に自分の後ろにおき、犬や人間から守った。これは、動物の本能なのかもしれないが、もともと、子熊が苦手だったティールなのに自分が山の王者で自分より小さい者を守ろうとする心には、負けてしまう。最後に感動したのは、やはりティールがラングドンを追いつめた所だった。今までさんざん銃で打たれたにもかかわらず、銃を壊してしまい死の直前に立って青ざめ弱々しくなったラングドンを見ると、今までの怒りをも忘れてしまい、むやみに殺すのも好きでなかったティールは、そのまま去っていった。人間には、とうてい真似できないことだった。

ビロードの様な緑の草地、薄紫色のスミレ、青々とした空、頭の中を次々と回っていく湖、小川、

森、尾根などロッキーの広大な大自然。そしてこの大自然の法則通り生きてきたマスクワとティール。特にマスクワは、その素直な心が、ティールやラングドンに、たくさんの影響を与えた。子熊が苦手なティールも好きになり、また、やさしくなった。ラングドンにもやさしさを与えた。そして、ティールとマスクワは、銃を持つことを罪だと思わせた。殺すことより生かすことの方が本当に喜ぶことなんだと。始めこの山に来た時のラングドンは、殺すことを喜び、命のことなど関係なく、記録を破ることを目標にしてた。それを山を出て行く時には、ティールをかばって自分の猟犬を撃ち、つかまえたアスクワも逃がしてやった。ラングドンに、命の大切さ、そしてやさしさ、強さ、偉大さを教えた二匹の熊たちは、とてもすごいと思い、いつか自分も動物の様なうそをつかない、まっすぐな目、そして自分にもうそをつかない心になりたい。世界体だけではなく、素直な自分を少しでも出せたらと考えた。

## 〔第2部 文学以外の部〕

### 「ぼく、もう我慢できないよ」 を読んで

2 C 川 西 雅 子

夏休みの課題図書『ぼく、もう我慢できないよ』を読んだ動機は、昨年学校の映画会で、『ユンの街』を見て、在日朝鮮人の問題について、私たちはもっと真剣に考えていかなければならないと思ったからです。この本を読んでもと、朝鮮の人たちに対する差別は、映画の場合とは比べものにならないほどひどいものであることが分かります。周囲の人たちの残酷さ冷酷さには、驚きを通りこして怒りさえ覚えさせられました。

この話は、朝鮮国籍をもつ在日朝鮮人三世の林賢一君が自殺したことから始まります。林君の家庭は姉弟と父母の五人で、林君は埼玉県上福岡市立第三中学校の卓球部に所属していました。林君は中学校に入学した後もいじめられて、一度自殺未遂事件をおこしますが、その後のいっそうのいじめに耐えきれなくなって自殺してしまうのです。

林君に対する学級や学年全体のいじめは、普通では考えられないようなひどいものでした。一人

の少年に、何人もの人間がよってたかって暴力を加える。やった側の人間にしてみれば、「ちょっとだけ。」——しかしそれが多人数によって行われたら、それは「ちょっとだけ。」ですまない問題なのです。クラブ活動においても、林君へのいじめはかなり多かったのです。林君に友達がいなかったわけでははい。優しい言葉をかけてあげる生徒もいました。けれども多くの生徒は、自分が林君を庇えば、そのことによって強い子にいじめられるかもしれないという恐怖感や心の弱さから、見て見ぬふりをしなければならなかったのでしょうか。

林君へのいじめがひどくなったのは、「歴史」で、朝鮮についての授業があってからだといえます。その社会科の先生はいったいどういう授業を行ったのか知りたいものです。林君は歴史の授業の時、どんな気持ちで聞いていたのでしょうか。いじめっ子たちは、そんな林君の気持ちにはおかないしにからかったのでしょうか。先生はどうして、歴史の授業の前に、一步ふみこんで、林君の気持ちを理解してあげようとし、人権についての大切さをみんなに教えなかったのだらうと思います。同じ人間であるにもかかわらず、どうして朝鮮人というだけで差別され、人権を奪われそれに耐えなくてはならないのでしょうか。朝鮮にだって、日本に負けないだけの立派な国の歴史、文化があります。それを知らぬまま朝鮮人であることを悩み苦しんでいる在日朝鮮人の人たちが多くいることでしょうか。こういう人々のためにも、学校では正しい歴史の授業を行ってほしいと思います。

林君が最後に自殺したのは、よくありません。しかし、林君は、自殺しかないところへおいつめられてしまったのです。「死」というギリギリのところまで追いつめられたいじめ……このあまりにも非人間的な行為を私は許せません。いじめられて、林君と同じような立場に立たされている人はまだたくさんいると思います。そして、現に今自殺しようと考えている人がいるかもしれません。私は、いじめの中にある差別と人権について、一人でも多くの人たちと話しあい、考えを聞いてみたいと思います。

在日朝鮮人の差到の問題を考えると同時に、部落差別についてももっと深く考えていきたいと思っています。差別して、人間を人間として認めない点で同じだからです。私たち一人一人に正しい認識と差別を許さぬ強さがあり、誰もがもつ愛情と優



しさとを大切にできる心があるならば、この社会から差別をなくすことが出来ると思います。

残酷な差別といじめに対して戦い、死をもって抗議した林君が私たちに伝えたかったこと、それと林君の家族の深い悲しみ——これをすべての人たちに知ってほしいと思います。「絶対に第二の林君をだしてはならない！」——私もまた著者とともにこう叫びたいと思います。

## 「ことばと文化」を読んで

4 E 小西健一

われわれ四年生は、小学校から日本語、中学校から英語、そして今年から独語と、三種類の言語を勉強している。この中で、日本語が他の言語——英語・独語に限らず——とは異なった構造をしていることは誰の目にも明らかだろう。

私は、課題図書の中から、「外国語との比較により、日本語・文化のユニークささえ浮彫りにします。」というコピーを見つけた。筆者は、そのユニークさというものをどういう風に表現しているのだろうか。読んでみたい、という衝動にかられた私は、この「ことばと文化」を読むことに決めた。

内容は、難しいことがいろいろ書いてあるのだが、むむっと考えさせられたり、思わず笑ってしまう部分もある。

例えば、日本語の「氷」「水」「湯」にはじまり、「雨」「霧」などの言葉で表わされるものは、本質的に言えばすべて同じものを指しているわけである。しかし確実なものとしての存在は H O だけであり、それ以外の名称は、名前だけの実体のない虚構であるということにもならないのである。言葉がしていることは、そのものに秩序を与え、人間の手に負えるようにすること、と筆者は述べている。言葉にこんな意味があるとは思ってもよらなかった。われわれが普段使っている言葉だというのに、なんと奥深いのかと感じずにはいられなかった。

面白い部分がある。「石とは何か」という段落があり、その中で「石」の意味を調べている。説明には、「土や木より固く、水に沈み、砂より大きく、岩より小さいかたまり。」と書いてある。笑った。ここでは思いっきり笑わせてもらった。

本当かなと思って手持ちの辞典で調べてみると、やはりそう書いてある。いいかげんなものである。「石」の意味がわからずに辞典を見たはずなのに、この説明に「砂」「岩」という言葉が出てきて、しかもこの「砂」「岩」を同じ辞典で調べてみると、「砂」は「非常に粒の細かい石」に、「岩」は「大きい石」となっているのである。わかりきったものを説明するのはとても難しいことだと思うけれど、もう少しなんとかならないものかと感じた。

日本語の面白い点についても書いてある。それは、「自分」をどういう言葉で呼ぶかということである。つまり、英語では常に自分のことを I で表わし、話し相手のことを You で表すのに対し、日本語では話し相手によって自分の呼び方を変えるという点である。自分の子供と話す場合は「おとうさん」や「パパ」、孫と話す場合だと「おじいちゃん」、どこかの子供が相手だと「おじさん」という風に自分と話し相手との関係によって自分をどう呼ぶかが決定されるという性質を持っているのはやはり日本語だけであろう。

われわれは、日本人である。巷では横文字が流行しているようだが、あくまでわれわれの母国語は日本語なのである。横文字は、確かにかっこいいと思うけど、日本人が日本語を使わなくなれば、誰が日本語を使うというのだ。私は日本人として、これからも正しく日本語を使っていきたい。

## “白球礼讃”を読んで

3 C 羽原登世

私は高専のクラブ活動として、野球部のマネージャーを3年間努めた。選手たちが精一杯のプレイをする、そんな高校野球の雰囲気が好きだった。少し話はズレるが私の父は野球が大好きである。特に応援するとかいうのではないが……。それに私も影響されたのかも知れない。……そんなわけで野球好きの我が家には野球関係の本——例えばエッセイ・小説・ルールブックなどがかなり沢山ある。そしてこの本“白球礼讃ベースボールよ永遠に”ももちろんあった。この本は始めから終わりまで野球好きな人が、自分の人生と野球との関わりを書いた本である。そういう本だからそれは当然だといわれればそれまでだが……。飾りのない、素直な思いを綴ったこのエッセイは、本当に素直に心の中に入ってくる。第一章で「ぼく」が



南海と西鉄の選手になり切って、一人野球を繰り広げる場面がある。この場面など光景が目に浮かぶようだ。ピン、と張り詰めた緊張感。こんな風に私は、平出氏と同じものを見、聞き、動いているような錯覚を起こしたまま、この本を読み進むことになった。

まず、この平出氏自身のキャラクターがいい。いわゆる“野球バカ”ではあるけれど、ここでバカのまま終わらず、チームをつくり、野球の為ならアメリカだって行く。野球にこだわらず、他のことでも、一つのことここまです情熱を燃やせる人が一体どれほどいるだろう。しかも、重さを感じさせない。野球が好きだ、という情熱だけでは生きられない。それは平出氏も経験されているけれど、ちっとも暗さがない。物書きと編集者と監督と選手、4つもの仕事の為をこわした平出氏は、どれか二つをやめると決意し、あっさり結論を出す。「そこでぼくは、会社をやめることにした。」豪傑だなあ、と思う。

平出氏の属するチーム、ファウルズは、話だけを聞けばお遊びにも見える。クーパースタウン殿堂公認チームになり、長嶋茂雄氏が名誉顧問、レロン・リー氏が名誉コーチ兼選手という、まるで冗談みたいだ。でもその他、年俸制度や新聞の一つ一つには、本当に野球を楽しんでいると感じさせる何かがある。今、プロ野球などがもてはやされているが、そんなマスコミに躍らされているよ

うなものより、自分でプレイをし、その試合の観戦をする、そんな野球の方が、しみじみと野球の喜び、本質を感じとれるのではないだろうか。

楽しさだけでなく、平出氏はきちんと忘れられて行く“良き時代の事”を憂えている。野球への情熱でもって、昔を掘り返した。そのことを描いた5・6・7章は読み終るともの哀しくなってくる。いつがいい、とかどれがいい、とかは自分には言えないが、いいものはいい。そしてこの皆が愛しているベースボールが現在に至るまでの陰には、いつも誰かの存在がある。それは絶対認めるべき事だし、忘れてはならないことだ。

あまり目立ってはいないが章の初めに必ず一編の詩や言葉が添えられている。どの言葉も野球への想いがこもっている。本だから章全部で一つの話なのは当然なのだが、この短く、しかし大きな意味を持った言葉を読むたびにその章への期待感がわく、だから私は10回気分を新たにすることになる。

平出氏はこの本で一人野球を行っている。もちろん0章はノックタイムだ。しかしこの0章に、始めにまとめというのも変だが、平出氏の野球のとらえ方がまとめられている。そしてきちんと9回を投げ、打ち、守り抜いた平出氏は、球場を後にする。

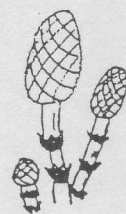
この素晴らしい試合運びに拍手を贈りたい。

## 校内俳句コンクール

平成元年度の読書週間は、「芭蕉と奥の細道」というテーマで、俳聖松尾芭蕉の「人と作品世界」をふりかえってみました。そして一つの試みとして校内俳句コンクールを企画し、学生・教職員の皆さんから作品を募ったところ、多くの素晴らしい作品が寄せられました。国語科の先生方の献身的なご協力をいただき、図書委員会で検討し、力作ぞろいの中から入選作、優秀作を選出いたしました。優秀作受賞者の皆さんは、1月の全校集会の場を借りて、表彰を行いました。入選者の皆さんに関しましては、各クラスに配布した掲示用プリントにお名前だけを記しましたが、この場を使い、優秀作・入選作すべてを掲載します。声にだして、味わってみてください。(以下敬称略)

[学生の部] (学年、五十音順)

- |    |     |       |                      |
|----|-----|-------|----------------------|
| 金賞 | 1 C | 上村 秀之 | 「天高し 紅白の球 (たま) 子らの声」 |
| 銀賞 | 1 E | 山下誠一郎 | 「軒の下 陽の当たりたる 冬の朝」    |
|    | 2 B | 藤岡 恵  | 「夜長し 数える星も 尽きるほど」    |
|    | 3 E | 田中 豪  | 「懐古園 なでしこ咲くを 人は見ず」   |
| 銅賞 | 1 E | 九里 伸行 | 「野良犬に 声かけて行く 秋の朝」    |
|    | 1 C | 宝田 晃  | 「夕焼けに 重なり消える 赤トンボ」   |
|    | 2 A | 藤城 順之 | 「信号で 停まって仰ぐ いわし雲」    |
|    | 2 E | 布元 伸卓 | 「はやきかな ある秋の日に 十七歳」   |



- 入選 1 E 内田 達清 「けがをした 左手かばい 栗をむく」  
 1 E 奥野 和行 「巨椋池（おぐらいけ） あとかたもなく 稲を刈る」  
 1 E 松岡 俊孝 「つややかに 窓にさしたる 朝の露」  
 1 I 井上 勲 「犬の子の 親に寄り添う 秋の夜」  
 1 I 福家 磯海 「我が祖父の 面影（おもかげ） 残す 稲の穂よ」  
 1 C 東 紀子 「秋雨の 中に孤独な 赤い傘」  
 1 C 伊藤奈穂子 「秋の雨 われ思う顔 ゆらしけり」  
 1 C 中村 苗織 「流星の 流れる先は 我が故郷」  
 1 C 長浜 大二 「朝寒や 寝起きの顔も ひきしまり」  
 1 C 松村 悦和 「天高し 少し気になる オゾン層」  
 1 C （匿名） 「秋の雨 思わずだれかに 電話する」  
 2 A 川合大三郎 「秋の空 一本の矢が 空を裂く」  
 2 A 喜 孝憲 「いわし雲 さっそうと行く バイクあり」  
 2 B 藤田 朋宏 「きりぎりす 命短し 昼も鳴く」  
 2 B 宮崎 敦守 「コスモスが 嵐のように 咲きみだれ」  
 2 E 井上 尚 「ジェット機の 飛ぶや向こうに 積乱雲」  
 2 E 阪本 正直 「おぼろなる 眠れる大地 白き霜」  
 2 C 木保みゆき 「いわし雲 流るる秋の 音聞こゆ」  
 2 C 前田 綾子 「紅葉（こうよう）の 雫（しずく）がおちる 恋ごころ」  
 3 E 田中 豪 「旅ゆけば 古城上田に はつしぐれ」  
 3 C 乾 実代子 「月の色 風の色にも 君の影」  
 4 I 高橋 陽子 「空には日 地にはさざめく 黄金の穂」

〔教職員の部〕（五十音順）

- 優秀 荒子 英子（学生課） 「うなりなき 蚊をそっと追い 障子張る」  
 井村 栄仁（電気） 「飛火野や 角無くひとり 雄鹿鳴く」  
 大矢 良哲（一般） 「秋山地 狩場（かりば）の神に 案内（あない）請う」  
 入選 荒子 英子 「金木屋 通勤の足 ゆっくりと」  
 犬田 修正（化学） 「霧晴れて 稲穂の先に 露ひとつ」 「彼岸花 黄金の波と 競いあい」  
 「菊一輪 捧げる野辺の 石仏」  
 井村 栄仁（電気） 「空砲や 黄金の海に 散るスズメ」  
 大矢 良哲 「無住寺の 径（みち）の枝折（しおり）か 曼珠沙華」  
 「藁煙 たなびく里の 丹（に）の社（やしろ）」  
 梶嶋 忠男（工場） 「定年を 悟りし肩に 木の葉舞い」 「名月に 我が歳うつす 孫の顔」  
 「退官の 友にうつりし 我がさだめ」 「松茸の 香りが嬉しい 夢まくら」  
 小島 耕二（機械） 「夕暮れの 雨のしずくや 秋燕」 「雨だれと こおろぎの音と 児の寝息」  
 田中 俊之（学生課） 「秋風が ゆらす穂波と わが心」 「稲刈りに 友を奪われ 知る季節」  
 仲西 清野（学生課） 「枝しなる 重たき柿の 実りかな」 「紅色の 遠き竜野の 赤とんぼ」  
 松井 幸栄（学生課） 「柿みれば 思い出にがき 疎開の地」 「運動会 つば広帽よりさがす孫」  
 松岡 一起（機械） 「野ボタンの花一輪落ち 文を閉ず」 「秋冷えや 子らの雄叫び藍を裂く」  
 「秋深し 学びの舎の灯（とう） 池に落つ」

わずか17文字で一つの世界が作りあげられる俳句は、日本人なら誰でも楽しめる文芸ですね。うまいへたを問う必要はありません。ただ虚心に、自分のまわりにある自然と生活を見詰める目が育ってゆけば、それが俳句の効用といえるでしょう。これをひとつのきっかけに、皆さんも創作の楽しみを味わってみませんか。